

『北と南』について (*North and South*)

木 村 晶 子

序

『北と南』は、ギヤスケル夫人の全作品の中で最も完成度の高い小説ではないだろうか。従来、労資問題が強調され、社会問題小説として評価されることが多かったが、そのような観点を離れ、より普遍的なコミュニケーションや個人の心理を描いた小説としてみると、いかにこの作品が、ひとつの芸術作品として絶妙なバランスを保っているかがわかる。見事な調和——それこそ、『北と南』の魅力であり、夫人の小説家としての資質と作品の素材が、ここで頂点に達する形で一致したように思える。以下、この作品を、社会問題小説から出発して次第に心理小説へと向うものと考え、それをたどりつつ、この見事な調和を具体的に明らかにしてみたい。

1. 社会問題小説からの出発

『北と南』は、労働者一辺倒の見方を批判された処女長編『メアリー・バートン』と違って、経営者側の立場を配慮して調和のとれた形で労資対立を扱った社会問題小説とされてきた。処女長編が思いがけずマンチェスターの一部の資本家の怒りをかったことは、夫人の心を傷つけたに違いなく、前作の、一方的に抑圧する側だったカーソン氏と違って、『北と南』の資本家像は、最も魅力的な人物として主人公と結ばれるソートンであり、経営者側の論理も十分説得力をもっている。

しかし、両作品の違いは、前作に対する批判を受けて方向転換を図ったというような単純なものではない。積極的に講演会などで知識を深めた夫人の視野の広がりもあるだろうが、最大の要因は、時代の変化とその中で夫人の小説家としての成熟であろう。「飢える40年代」、中でもチャーチスト運動の年、1848年に出版された前作から6年を経て出た『北と南』には、ルイ・

カザミアン¹⁾の指摘するように、過激な思想より中庸が重んじられるようになった1850年代の風潮が感じられる。また、労資という単純な二項対立の構図のみで小説世界を構築するには、あまりにも英国社会は激しく変容していただろう。めざましい海外進出、農業から工業人工優位の社会への変化、都市への人工流入の加速化²⁾、爆発的な中産階級の増加等を背景に、社会的地位の上下も珍しくなかった。

このような変化は、『北と南』の主要人物の多くに反映され、宗教的、社会的、経済的な面での変化を被る中で自らの帰属すべき場所や信仰を絶えず問い直す人々の姿が描かれることになる。経営者ソーントン自身も、無一文の奉公人から日々の儉約と努力で身をおこした人物で、一介の労働者が資本家になり得る一方で、逆に破産する危険もあるのは後半に描かれる通りである。国教会の牧師職を捨てたマーガレットの父ヘイル氏、船上の反逆罪に問われ英国籍を捨ててカトリックに改宗して第二の人生を始める兄フレデリック、裕福な令嬢としての過去に執着しミルトンでの生活に適應できない母と召使い等、主人公をめぐる人物達の様々な境遇を見れば、二十世紀に向って確実に変化のスピードを速めてゆくヴィクトリア朝社会の大きなうねりが作品の底流に感じられるのである。

けれども、社会をうつつし出す鏡として作品を見ることは、夫人の社会批判の甘さを非難したり、階級闘争の枠組を無理にあてはめる誤りをひきおこしかねない。労働者の生活に心を痛めて書かれた『メアリー・バートン』や未婚の母という主題を扱って悪書として焼かれさえした『ルース』の作者として、夫人が弱者のスポークスマンを目指し、現代の読者の想像を超えた社会的影響力をもっていたことは軽視されるべきでないにしろ、労資問題それ自体は決して作品の中心的主題ではない。近年、フェミニズム批評の立場からギヤスケル夫人の再評価がなされ、階級闘争を中心にした作品解釈が批判された上で、新しい観点から家族関係の重要性や、抑圧された女性の性意識等興味深い問題に光があてられている。法や経済という男性的枠組にとらわれない、女性的な愛や知を軸にした連体感を描き出している点を評価するパーティー・ストーンマン³⁾には学ぶべき点が多い。

しかし、ここでは、あくまでも作品に即して、社会問題から次第に個人の内面へと視点を移してゆく夫人の描き出す世界に注目していつてみたい。『メアリー・バートン』に感じられた、プロットを優先するあまりの不自然な人物描写もなくなり、アーサー・ポラードが述べるように、初めて「夫人の小説は、集合体としての人間 (people) でなく、個々人 (person) を描くもの」

となり「社会的経済的力に影響される存在としての個人より、個々人が他者にどんな意味をもつかが窮極の主題」となった⁴⁾。次に、主人公をめぐる人間関係をくわしく見てゆきたい。

2. コミュニケーションの小説としての『北と南』

主人公マーガレットとソーントンは、労働者代表としてのジョン・パートンやメアリーより遥かに陰影に富んだ人物である。殊にマーガレットは、社会の犠牲者ともいえるメアリーやルースとは全く違うヒロインだろう。ここで注目に値するのは、『北と南』の主要人物にとっては、階級よりも‘man’と‘woman’—「男」と「女」としての自己規定が大きな意味をもつ点である。

I take it that “gentleman” is a term that only describes a person in his relation to others ; but when we speak of him as “a man”, we consider him not merely with regard to his fellow-men, but in relation to himself—to life—to time—to eternity.⁵⁾

マーガレットと議論してこう語るソーントンの言葉は、他者との関わりを中心にした相対的、しばしば世俗的な価値に過ぎないgentlemanではなく、絶対的価値としてのman、神との関わりを中心にしたひとりの人間としてのあり方を重んずるものであり、彼を単なる資本家という社会体制の中での役割を超えた深みと広がりのある人物にしている。それはまた、gentlemenらしさが何より重んじられる彼らの社会から人物達を解放し、より普遍的な自由へと近づく価値観でもあろう。愛を告白して、彼女から「gentlemenらしくない」とどんなに非難されても、彼は、‘I am a man. I claim the right of expressing my feelings.’⁶⁾と言い返すことができる。そしてまた、彼女が、労働者の声に耳を傾けるよう説得するのは、集団としてでなく個人対個人、即ち‘man’として彼らに接するよう説くことである。

ソーントンのように意識的に区別は口にされないにしろ、マーガレットにとっても、ladyとwomanという二つの基準が同様に存在する。作品の冒頭と最後の舞台、ロンドンのショー叔母の家は、‘lady’の基準を象徴し、「どの程度権威に服従し、どの程度自由に行動できるかという女性にとって最も難しい問題」⁷⁾に悩むマーガレットは、‘lady’としての社会規範と‘woman’としての根本的な個人の自由の葛藤に苦しんでいると解釈することもできる。ショー叔母や従妹エディスが‘lady’を至上の価値とするのに対し、主人公は常に‘woman’

としての個人の成長を目指しているのではないだろうか。ソーントンを暴徒から庇ったマーガレットの、‘woman’なら誰でもする当然の行為という言葉も、このような文脈では一層意味深く思える。また、結末の部分でようやく結ばれた二人がお互いを母や叔母に紹介したら「あんな男!」「あんな女!」と言われるだろうと話すところ⁸⁾も、‘that man’& ‘that woman’が様々な誤解や偏見、違いを乗り越えて到達する理想のあり方を暗示しているように思え、『北と南』は、‘man’& ‘woman’として結ばれるまでのより豊かな、真のコミュニケーションを探求する物語と感じられるのである。

ソーントンとマーガレットは、各々、男性的価値、女性的価値を表わすと同時に、北のミルトン(マンチェスター)の新しい工業文明と南のヘルストーンに代表される牧歌的な農業文明という相反する文化圏を暗示し、更に彼女が労働者ではないにしろ、経営者の論理と労働者の論理の対立も表わしている。これらの対立を融合し、両者のより良いコミュニケーションを旨とす核となるのがマーガレットである。彼女は、価値観の一方の極であると同時に、作品世界のあらゆる行動の基点となり、更に自らが変化、成長することで二つの対極を近づける原動力ともなるのである。

このような複雑なヒロインの機能をそなえたマーガレットは、夫人の全ヒロイン中最も雄弁な、‘articulate’な人物として描かれる。冒頭の、sleeping beautyのように居眠りするエディスと対照的に彼女は覚醒したヒロインであり、まず美貌が目をはひくメアリー、ルース、シルビア等の被害者的主人公とは違う。彼女が「語る」ヒロインであることは、レノックス氏の求愛の拒絶、牧師職を捨てミルトンへ移る決意を母に伝えるよう父に頼まれること、誰もが尻込みするパウチャーの自殺を妻に伝えること、母の不治の病を聞き出し、兄を呼び戻す手紙を書くこと等のエピソードで常に印象づけられる。そして、作品の山場、ソーントン邸襲撃の場面で、軍隊の力で抑えようとする彼に“Speak to them”⁹⁾と繰返す彼女の言葉にみられる対話に対する信頼感は、コミュニケーションの中心としての彼女の役割を表わしているだろう。いかに利害が相反しても、個人として「語る」ことによるのみ理解し合えるという、個人の尊厳とその最も重要な表現手段としての言葉への信頼がそこにある。

しかし、暴徒と化す群衆の前にそのような信頼は無効で、ソーントンの盾となった彼女は額に投石を受けてしまう。ここで、言葉によるコミュニケーションの試みは挫折するが、この行為によってソーントンが密かに抱いていた恋心を自覚するという意味で、別の形のコミュニケーションのきっかけになったと言えるだろう。にべも無く拒絶しながらも、逆に彼女の潜在意識の

中では、彼の存在が次第に大きくなってゆくのである。

ここで気づくのは、二人の関係が労資関係という、より大きな社会の関係と密接に関わり合っていることだ。『北と南』の見事さは、対立する男女の成長と恋愛という個人の関係が、労資の対立、衝突、和解という社会問題の展開と並行し、重なり合う点ではないだろうか。ミルトンの産業社会は、単なる二人の恋物語の背景ではなく、また逆に二人の物語が社会問題を描く手段でもない。恋愛小説でも、社会小説でもない、コミュニケーションの小説として、主人公達は社会との関わりの中で成長し、その個人の関わりが反対に社会を変革する力にもなる。従って二人の恋愛においては、ソーントンが彼女の白い腕の感触を思い焦がれる描写はあっても、ロマンティックな胸の高なりより、労働者との関係や、社会観、世界観の成熟が重要なものとなる。彼女の友人ヒギンズを雇い、労働者専用食堂をつくること、彼の恋愛表現に通じ、労働者の信頼を得た彼が、事業に失敗しても再び彼の下で働きたいという嘆願書をもらうことは、彼が愛される価値ある人間だと保証することになるのである。「あなたのお気に入るとわかっていました」¹⁰⁾という彼の彼女に対する言葉はそれを裏づけるだろう。また、「工場経営者なんかには紳士の嗜みの古典や文学の何がわかるっていうの！」¹¹⁾と彼らを軽蔑し、ミルトンを嫌っていた彼女にとっては、偏見を捨て‘gentleman’の基準から‘man’の基準へと成熟した世界観をもつことが愛を成熟させる条件となる。彼と議論した時は、南の良さばかり主張していた彼女が¹²⁾、次第にミルトンのスラングまで使うようになり、南へ働きに行こうとするヒギンズには、逆に南の生活の辛さを説き、どこの土地にも苦勞はつきものだと言語までになる上、父母の死後ロンドンに引取られてからは、空虚な社交生活の中で、矛盾を抱えつつもエネルギーに満ちたミルトンを恋しく思うのである。

ここで、ヒギンズ父娘の重要性に注目したい。ヒギンズの娘ベティが工場場で吸った綿毛のため肺を患って不幸な死を遂げるのは、『メアリー・バートン』に似た悲惨な労働者の現実を描き出すばかりでなく、彼女が天使の如くマーガレットを崇拝することで、マーガレットの人物像に深みを与え、同時に心情的にマーガレットを労働者の側に置く決定的要因となる。父ヒギンズの雄弁でプライドが高く情に厚い姿は、ジョン・バートンを思い出させるが、『北と南』では、ソーントンとマーガレットの関係において非常に重要な役割を演じているだろう。血筋の上では、資本家ソーントンより上位のマーガレットが、労資対立の中で、労働者代表たり得るのは、彼ら父娘との友情による。そしてこの対立が相互理解、共感へ向かうと同時に、二人の恋愛が成

就してゆくプロットの要として、社会問題と個人的関係を融合させるのがヒギンズの存在である。ヒギンズを通してマーガレットは労働者の現実を肌で感じとり、不幸な死を遂げるバウチャーの遺児のために職探しをする彼に、ソーントンに雇ってくれるよう頼みに行くことを勧める。二人の恋愛感情がもつれたまま誤解し合って話すこともない間も、ソーントンがヒギンズとの友情を育むことで、結果的に彼女との愛を育てていたことになる。また、夜道を歩いていた「恋人」が実は兄だったことをたまたまソーントンに話し、誤解を解くのもヒギンズである。こう考えると、「…でもな、この大きな煙ったい所で北と南が出会って、友達みてえなもんになるってわけだ」¹³⁾と、北と南の融合を作品で初めて口にするのが彼であることは、象徴的に思える。

このように、ヒギンズを重要な媒介として、個人的レベルと社会的レベルでのコミュニケーションをマーガレットを中心に展開、融合させた作品として『北と南』をとらえると、このコミュニケーションの障害となる彼女の嘘が先程の「恋人」の誤解を生んだことは、より深い意味をもつように思える。ミクロな個人の問題とマクロな社会問題が並行し、影響し合っただけでなく、より豊かなコミュニケーションを目指す作品構造の中で、この嘘は、彼女を次々と襲う愛する人々の死と共に影の部分形づくっている。しかし、この影の部分によって『北と南』は、単なるコミュニケーションのみでなく、個人の心理の深層まで描き出しているように思える。以下、そのコミュニケーションを阻むものともいえる影の部分について考えてみたい。

3. 心理小説へ向う『北と南』

『北と南』で集団の枠組を離れた個人へと視点が移ったことは前述したが、その個人のあり方が、常に他者とのより良い関係を求める方向性をもった、開かれたものであることは、注目に値すると思う。多少、偏屈で無愛想だとしても、夫人の人物は、例えばブロンテ姉妹やG. エリオットの人物を思うと、牢獄のような孤独の固い殻に悩まされていないのは明らかだ。孤独の闇で絶望し自らを問い直すという点に最も近いのは『シルヴィアの恋人達』のフィリップかもしれないが、それでも、そこにはシルヴィアへの絶対的愛という確かな方向性がある。よく、夫人は善人しか描かない、または描けないと言われるが、善悪といったモラルの問題より、他者を受入れる心の風通しの良さのようなものが宗教観と相まって人物達を「善人」とするのではないだろうか。他者とのコミュニケーションへの志向が彼らを絶望から救い、悪の最も確かな下地となる閉ざされた自己の闇から遠ざける。夫人の悲劇的設定に

は、真の悲劇に不可欠なこの闇に、絶えず友情や愛情、あるいは嫉妬や羨望が風穴を開けてしまうため、もうひとつ物足りない気もするが、この他者へ向かう方向性こそが、夫人の作品全体に独特の安らぎと香気、困難を克服する勇気を与えているように思える。

このような作品世界で、闇と呼べるのは、先に述べたように、他者への志向の障害となる、嘘や人と分ち合えない隠し事と愛する人々の死である。ジョン・バートンを苦しめたのは、殺人の罪以上にそれを隠し続けることだったし、ルースやベンソン氏が未婚の母の過去を偽ったり、フィリップがプレス・ギャングに誘惑された恋人のことを隠したり、モリーがシンシアの秘密を守った為に中傷されたり、夫人の作品では、人に言えないことや嘘は、最大の試練をもたらす。反逆罪に問われている兄をかばうため、警官の質問に嘘をつくマーガレットの場合は、単に隠し事をするだけでなく「私は、その場にはいませんでした。」¹⁴⁾とはっきり口にすることが、「語る」ヒロインとしての彼女の性格を表わしているかもしれない。この嘘がキリスト者としての神に対する罪であるだけでなく、その場に偶然居合せたソーントンに嘘を見抜かれることによって他者を前にした罪であることは意味深い。嘘が、それ自体の罪以上に、他者との関係において真のコミュニケーションを妨げる罪であることは、夫人の文学の特質を表わしている。ソーントンの恋心がかなり早くから印象的なものであるのに比べ、マーガレットの想いはそれ程はつきり表現されないが、この嘘を契機に彼女の恋心は読者にも明らかになる。病身の彼女の母への優しさやヒギンズとの関係で彼への信頼が深まる一方、彼女の嘘を知りつつ何も言わずに警察の捜査を打切らせたのが彼だと知って、彼女は脅迫観念に近い程、彼の評価や非難を気にかけるのである。

ここで改めて気づくのは、二人にとっての恋愛が各々の試練であり、社会的、内面的苦しみを乗り越えねば成就しないことだろう。彼にとっての試練が労資関係という社会的レベルのものとする、彼女にとっては、より個人的レベルで、嘘をきっかけに言葉への信頼を新たに問い直すことではないだろうか。道徳的には、死刑の危険すらある無実の兄を庇う行為として十分納得できる嘘であり、むしろあの場で嘘をつかないことの方が不自然とすら言えよう。しかし、ここで彼女を脅かすのは、常に彼女を支えてきた存在の基盤とも言える、言葉と行為の一致、言葉と感情の一致が崩れたことではないだろうか。コミュニケーションの中心として言葉への信頼を表わす彼女は、嘘をついて初めて、言葉と行為、言葉と内面は必ずしも直線的につながらないこと、善意であっても、あるいはあるがゆえに一層、両者の隔たりが大きく

なるのを身をもって知るのである。

もうひとつ考えるべきなのが、彼女を取巻く人々の死という、より大きな影の部分である。ベティーやバウチャーの不幸な死の他、母、父、名付け親の死は、作品をあまりに暗くしていると非難されることもあるが、夫人の小説を書くそもそもの動機が一人息子の死の悲しみを克服することだったのを思えば不自然とは感じられない。最初『北と南』が『死と変容』という題で構想されたことも、夫人の関心が死の問題だったことを裏づける¹⁵⁾。『メアリー・パートン』では多くが社会の犠牲者としての死だったのに比べ、『北と南』ではより個人的な状況に焦点が当てられ、嘘を通した、言葉への信頼を問う試練以上の、時間への信頼を問う試練になっている。「人生が何と虚しい見世物に思えることか！何と虚ろではかなく過ぎ去ってしまうことか！」「全ては影に過ぎない！¹⁶⁾」と思える程、全てを奪い去る死の猛威の前に、安定した日常の時の流れは破壊されてしまう。

ここで救いをもたらすのは、故郷ヘルストーンを再び訪れ、大きく変わった村の姿を見ることである。「個人個人の無意味さ」を感じて困惑するマーガレットも、朝の光を浴びて希望を見出し、変化なくしては、進歩も成長も無いことを悟る。時は、全てを奪う力をもつ反面、全てを癒すこともできる。更に、海辺でひとり波を見つめ、「過去と未来のでき事を正しく位置づける」¹⁷⁾ことによって、再び、時間に対する信頼が取戻されるのである。

ヘルストーンと海という二つの自然に、人を癒す力があることは、常に風土と切離せない夫人の作品における空間の重要性を改めて考えさせる。人は場所に制約され、限定される一方、場所から活力を与えられもする。対照的な土地ミルトンとヘルストーンを中心に、海という自然や、反自然と言えるロンドンを舞台にすることで、死によって意識される時間の軸の他に、風土と人間の関わりという空間の軸が作品を豊かにする。言葉に対する信頼と時間に対する信頼を空間的な関わりの中で問い直すことによって、マーガレットは、本当の成長を遂げる。死を前にした人生の虚しさを受入れ、なお、謙虚に真実を語ろうとする次の一節は、特に意味深く思える。

...And now she had learnt that not only to will, but also to pray was a necessary condition in the truly heroic. ...If all the world spoke, acted, or kept silence with intent to deceive, —if dearest interests were at stake, and dearest lives in peril, —if no one should ever know of her truth or her falsehood to measure out their honour or contempt for her

by, straight alone where she stood, in the presence of God, she prayed that she might have strength to speak and act the truth for evermore.

18)

「真実を語り、真実の行動をとること」即ち言葉と内面、言葉と行為を一致させる難しさを知った今、決意するだけでなく、弱い自分を悟った上での祈りが必要なのだ。この祈りは、前半の、ベティーの病の床での自信に満ちた祈りより遥かに重味をもっている。嘘の罪で言葉の否定的な力を知り、全てのコミュニケーションを虚しくする死の悲しみを克服して、彼女は、単なるコミュニケーションの中心を超えた、真の「語る」存在に成長するのである。

ただ、マーガレットの成長は、親に守られていた少女が自立するという類のものではない。ストや暴動など、動的な作品の前半と対照的に、長い物想いの日々を過ごし内へ内へとエネルギーを向けて死の悲しみを乗り越えようとする彼女を中心にした後半は、静的な印象を与え、それを経てようやく彼女は新しい女性として生まれ変わるように思える。夫人自信の経験を反映してか、夫人の多くのヒロインは、母親に死別し父親の行動によって辛い思いをしつつ献身的に親に尽くす人物である。マーガレットもその例にもれず、親に保護されるどころか逆に、家庭内の保護者の立場にたつて父代りに決定を下し、両親を母のようにいたわる場面が多く見られる。それが、彼女の「自分を過信した誤ち¹⁹⁾」にも通じるだろう。とすると、両親の死は、彼女を悲しみのどん底に突き落したに違いないが、同時に無意識に彼女を束縛していた親代りの立場の重荷から解放し、家族という小宇宙から彼女を解き放ったのかもしれない。

こうして様々な意味で成長した彼女が、最終章では、名付け親の遺産を相続し、破産したソーントンに援助を申し出る結果、再び愛の告白を受けて結ばれる訳だが、一見御都合主義にも見えるこの遺産相続は、作品の結末にかなり大きな意味をもつようにも思える。このお金で事業が再開されることは、二人の恋の成就が同時に労資問題の明るい見通しをもたらす点で、作品の社会的レベルと個人的レベルの重要な相関関係をしめくくるものと解釈できる。また、既婚婦人が自分名義の預金口座すら持てなかったヴィクトリア朝において、女性の経済力の意味は深かったに違はなく、同時に、作品後半の自己に沈潜した個の世界からマーガレットを再び社会の枠組に引戻す役割も果たしているだろう。それは、「真実を語り、真実の行動をとること」を祈った彼

女が、その純粋さゆえに陥る不幸から免れる力ともなり得る。彼の求愛に対し、以前はあれ程はつきり拒絶した彼女が、恥かしそうに沈黙したまま、「やさしい暴力」²⁰⁾で、彼の手から押花を取ろうとする姿は、内省的な孤独の世界から、社会と個人の幸福の両立が可能な世界へと旅立つための謙虚さと強さを暗示しているように思えるのである。

結び

分冊形式に苦しみながら発表されたにもかかわらず、以上のように『北と南』を考えてゆくと、その構成力の見事さは、夫人の作品の中だけでなく、際立ったものに思える。以上『北と南』を社会問題から個人の心理へと重点が移る中で、社会的レベルと個人のレベルが有機的に関わっている作品として評価してきた訳だが、これ以降、ますます夫人の関心が社会問題から離れてゆくのは明らかで、次作『シルヴィアの恋人達』でも作品展開の要とはいえ、プレスギヤングという社会問題は、既に終わった過去の事象として扱われている。社会現象が個人の運命を左右しても、最早『北と南』の緊密な相関関係は無く、主人公の恋愛が社会の枠組と調和し、その影響を受けつつ逆に社会を変革し得たのに比べ、ここでは、愛を貫こうとする程、反社会的存在となる悲劇的状況が描かれている。また、ブロンテ的な激しい情念は、昔の素朴な人々のものとして描かれてさえ、夫人本来のバランス感覚と調和を基調とする作品世界にはそぐわない感じを与える。

マイケル・フィーラーは、夫人のバランス感覚にはオースティンに通じるものがあり、ある意味でオースティンからG. エリオットをつなぐ社会的リアリストとして評価している²¹⁾。確かに、最後の『妻達と娘達』は最もオースティンの作品で、家庭小説の見事な観察力とユーモアに満ちている。しかし、終始、家庭小説の限られた空間が全世界だったオースティンと違って、夫人がユーモアや風刺とは程遠い悲惨な現実から出発してオースティンの小宇宙に到達したことは興味深い。それは、作家としての円熟の過程と言えのだろうが、私には、『北と南』で完成した社会的レベルと個人的レベルのバランスが崩壊してゆくことに思える。『妻達と娘達』は、夫人の死により未完だったとはいえ、非常に優れた作品だが、社会というマクロな世界と個人というミクロな世界の見事な相関関係と調和は見られず、コミュニケーションに対する曇りのない信頼も無い。それは、夫人の人間観察の深まりの証拠かもしれないが、私にはむしろ言葉と感情や、言葉と行為が明快に一致し得る社会が消滅してゆくことに思える。マーガレットをあれ程苦しめた嘘が、モリー

の継母にとっては、どんなに嘘をつき続けても本人に嘘の自覚が無い以上、罪として成立しないことを見ても、むしろ言葉と感情や行為のずれが、より確かな人間像を描き出す社会が出現したように感じられる。このような社会では、言葉はかつてのような力をもってコミュニケーションを生み、社会を改革することはできず、個人との関わりの中から社会の全体像をとらえることも不可能である。ここに、社会と個人が加速度的に乖離してゆく二十世紀文学への方向性を垣間見ることができるようになるのである。

(注)

- 1) Cazamian, Louis. *The Social Novel in England 1830-1850* trans. Martin Fido. London and Boston : Routledge & Kegan Paul, 1973 (first published 1903).
- 2) イングランドとウェールズの全人工のうち1841年までは48.3%だった都市居住者が1881年には70.2%にまで増えている。
- 3) Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Sussex : The Harvester Press, 1987.
- 4) Pollard, Arthur. *Mrs. Gaskell, Novelist and Biographer*. Manchester : Manchester University Press, 1965. P.138.
- 5) Gaskell, Elizabeth. *Norht and South*. Ed. Dorothy Collin. Harmondsworth : Penguin, 1970. P.218 (C.20). 以下テキストはこの版とする。
- 6) Ibid., P.253(C.24).
- 7) Ibid., P.508(C.49).
- 8) Ibid., P.530(C.52).
- 9) Ibid., P.232(C.22).
- 10) Ibid., P.526(C.51).
- 11) Ibid., P.72(C.4).
- 12) Ibid., P.122(C.10).
- 13) Ibid., P.112(C.8).
- 14) Ibid., P.343, P.345(C.34).
- 15) *The Letters of Mrs. Gaskell*. Ed. J.A.V.Chapple, Arthur Pollard. Manchester : Manchester University Press. 1966. No.220.
- 16) Gaskell, Elizabeth. Op. cit., P.225(C.21).
- 17) Ibid., P.506(C.49).

- 18) Ibid., PP.502-3(C.49).
- 19) Ibid., P.502(C.49).
- 20) Ibid., P.530(C.52).
- 21) Wheeler, Michael D. *English Fiction of the Victorian Period(1830-1890)*. London : Longman, 1985. P.73.

[その他の参考文献]

- Calder, Jenni. *Women and Marriage in Victorian Fiction*. London : Thames & Hudson. 1976.
- Cecil, Lord David. *Early Victorian Novelists : Essays in Revaluation*. London : Constable. 1934.
- Craik, W. A. *Elizabeth Gaskell and the Provincial Novel*. London : Methuen. 1975.
- Easson Angus. *Elizabeth Gaskell*. London, Boston and Henley : Rou Hedge & Kegan Paul. 1979.
- Gérin, Winfred. *Elizabeth Gaskell : A Biography*. Oxford : Oxford University Press. 1976.
- Mores, Ellen. *Literary Women*. London : Women's Press. 1985.
- Sanders, Gerald Dewitt. *Elizabeth Gaskell*. New Haven : Yale University Press. 1929.
- J. P.ブラウン著, 松村昌家訳『十九世紀イギリスの小説と社会事情』東京 : 英宝社. 1987.
- 山脇百合子. 『エリザベス・ギヤスケル研究』東京 : 北星堂. 1976.
- 鷺見八重子. 岡村直美編『イギリス小説の女性たち』東京 : 勁草書房. 1983.